

日本における虎と竹の取り合わせに関する一考察

高 語莎

寺院やお城の障壁画には、虎と竹はよく一緒に描かれていることは周知の通りである。これまでは、現存作例に関する美術史的研究の蓄積がなされてきたが、この虎と竹の取り合わせの成立についてまだ不明なところが多い。本発表では、こうした虎と竹の取り合わせの成立過程について検討を加えたい。

まず、先行学説を確認の上、虎図に竹を描くことは、『金光明經』の記載のように、釈迦の本生譚の一つである捨身飼虎説話から影響を受けたことについて確認する。捨身飼虎説話を摂取した和歌の用例を分析し、虎と竹との取り合わせの背景には、捨身飼虎説話が関係している可能性が高いと指摘する。

次に、虎と竹の取り合わせの定着について考える。そこで、日本の絵巻物における虎の造型を見ていく。平安時代から室町時代にかけての重要な絵巻物を取り上げ、それぞれの虎のイメージを考える。特に、十四世紀に制作された「玄奘三蔵絵」と十五世紀に制作された「十二類合戦絵巻」から示唆されるように、虎と竹は連想関係にあることが確認される。このような事象は、絵画作品のほか、連歌や和漢聯句など室町期の文芸にも見出せる。虎と竹との取り合わせは、捨身飼虎説話の影響下にある文学作品から生まれたが、のちに当該説話から脱却していき、一つの取り合わせとなったことが見て取れる。

最後に、五山文学作品から竹虎図と思われる絵画作品の画賛を抽出して考察を行う。賛の内容を丁寧に分析し、どのような絵に対して画賛を施したか、そして如何なる手法で虎と竹を描写したのかを明らかにする。また、そうした絵画にみえる虎と竹の取り合わせは、先述した和文学の世界で成立したそれとどのような関係にあるのかを論じてみたい。

本発表を通じて、虎と竹の取り合わせはどのように成立したかを解明することが期待される。また、中世における文学と絵画との相互の関係を再検討するための契機たりうると考えている。

日本における虎と竹の取り合わせに関する一考察

高 語莎

はじめに

掛軸、屏風、または仏教寺院やお城の障壁画などでは、虎の絵には竹が配されていることは周知の通りである。このような構図は「竹虎図」と呼ばれ、代表的な漢画系画題として十五世紀以降、日本で多く製作された。

竹虎図の先蹤は十四世紀の絵巻物に見える。康永三年（1344）に成立した「本願寺親鸞聖人伝絵」（照願寺蔵）巻二、定禅法橋が親鸞の真影を描く場面では、室中の杉戸絵に虎と竹林が描かれている。^一こうした絵画化された虎と竹は、中国宋元絵画の影響下にあるとも言われる。^二だが、虎と竹の取り合わせは文様として鎌倉期に遡りうる。例えば、赤糸威鎧（竹虎雀飾）（春日大社蔵）、竹虎文鏡（貫前神社蔵）、金銅琵琶（丹生都比売神社蔵）、竹虎双雀方鏡（春日大社蔵）などが遺品として挙げられる。

本発表では中古から中世にかけての文献資料を取り上げ、日本において虎と竹が取り合わされた事由について検討を加えたい。

「竹林虎」と今様の心

虎と竹が服装の飾り物に用いられたことは、藤原経光の日記『民経記』に確認される。同書天福元年（1233）四月二十三日条では、当日に行われた賀茂祭の祭列について詳しく記載しており、以下の語句が注目される。

中原行範 下部、付竹林虎、今様心云々、^三

ここの下部は「放免」ともいい、検非違使庁の下級官吏であり、賀茂祭に際して鉾を持ちながら検非違使に従って参列する。「付」は「付け物」のことをいい、特に賀茂祭の折に検非違使の下部の水干に付ける飾り物を指している。賀茂祭において下部は派手な装束や飾り物をすることが知られているが、^四ここでその服に「竹林虎」の飾り物が付いていたと確認される。

つづいて「竹林虎」の付け物は「今様心」だと記されている。その意味を考えるに、時代が下ったが、『徒然草』二二一段の記述が有益である。

建治・弘安の比は、祭の日の放免の付物に、異様なる紺の布四五反にて馬をつくりて、尾髪には灯心をして、蜘蛛のい描きたる水干につけて、歌の心など言ひてわたりしこと、常に見及び侍りしなども、興ありてしたる心地にてこそ侍りしか」と、老いたる道志どもの、今日も語り侍るなり。^五

「歌の心」とあるように、賀茂祭における検非違使の下部（放免）の装束が和歌の意を表すことが物語られている。^六「竹林虎」の付け物は、「詩歌の意を風流にして、形の上に作り出すが如きもの」^七との説明の如く、当時に流行していた歌謡である今様を意匠されたものと考えられる。^八

虎と竹の取り合わせは『金光明最勝王経』「捨身品」の捨身飼虎説話を端緒と

することは先学に指摘がある。^九これは釈迦本生譚の一つで、薩埵王子が竹林を訪れ、飢えた虎を憐れみ、衣を脱いで竹にかけ、身を捨てて虎を飼うということである。同説話を踏まえた今様の作例は後白河法皇撰『梁塵秘抄』に見える。

太子の身投げし夕暮れに、衣は掛けてき竹の葉に^{一〇}

「太子」は薩埵王子を指すと考えられる。衣を竹の枝に掛けるのは、身を虎に投げ与える所以である。むろん、「竹林虎」の付け物はどのような作をもとにしたかを断ずることはできないが、この事情を手掛かりに、和歌の世界で同型の発想を探ってみたい。

捨身飼虎説話から虎と竹の付合へ

捨身飼虎説話は平安期以降、『三宝絵詞』をはじめとする文学作品を通じ、日本でも広く周知し、さらに和歌にも取り入れられた。田中宗博氏の考察によると、捨身飼虎説話に関する歌は釈教歌と恋歌に大別され、早くも『拾遺和歌集』に見られ、江戸時代まで詠まれ続けていったという。一氏が取り上げた作例には、「身を捨つ（投ぐ）」、「竹の林」、「衣」、「虎」などの説話ゆかりの表現が散見される。しかも、虎と竹の片方のみが詠まれるとしても、説話への連想によって両者の存在は創作者・受容者に容易に想起されると思われる。また、発表者は虎を詠む歌を全般的に調査したが、竹との取り合わされたものに当該説話を詠じた作がほとんどである。

室町中期に成立した連歌寄合書は虎と竹の取り合わせの定着を明確に示している。連歌は「座の文芸」と称され、複数の作者によって即興的に作られ、前句と付句との間に言葉や素材の付合が求められる。虎と竹に関しては、一条兼良『連珠合璧集』（文明八年（1476）以前成立）に「竹の林トアラバ、とら」、「虎トアラバ、竹　うへたる　身をかふ」、恵俊『連歌寄合』（明応三年（1494）成立）に「竹の林に、虎を付は、薩埵王子の心也」とある。虎と竹は捨身飼虎説話と深いかかわり合いをもっており、組み合わせとして定番化されたと考えられる。

例えば、『看聞日記』紙背文書所収の応永年間の連歌には「とらのふしとやまだらなるらん/風にもる竹の葉（分）の月涼し」^{一一}とある。前句では「とら」と「まだら」とは連想関係にある言葉である。その上、付け句は「竹の葉」で前句の「とら」に付けたのである。

他方、猪苗代兼載独吟の「聖廟千句」には、「かりごろもたかねの雲をかたしきて/すてぬる身をぞいづくにもをく/とらのふすのべにはかよふ人もなし/竹のはやしの風はすさまじ」^{一二}とある。ここに見える「かりごろも」、「すてぬる身」、「とら」、「竹のはやし」はいずれも一見して捨身飼虎説話と関係するよう思われる。ただ連歌の規則としては、同じ本説による付合は一般的に三句にわたってはいけない。^{一四}これを考慮に入れると、「とら」と「竹のはやし」は説話の文脈から脱却し、寄合語として使われるだけであった。

さらに興味深いのは「羽柴千句」の用例である。「中のころものは凄し/身を捨て虎住竹は陰ふかみ/おくか奥まで分こゆる山」^{一五}とあるが、ここに「虎住竹」という文言がみえる。「住」の語が用いられたことは、「虎は竹林をすみかとする」観念を反映していると言えよう。

加えて和漢聯句の場合、「竹嘯藏風虎」（大永七年十月十日和漢百韻）、「風竹多逢虎」（大永七年十一月二十六日和漢百韻）^{一六}といった例があり、漢句においても虎と竹の関連性が端的に表されている。

以上のように、和歌や連歌の用例を確認した結果、虎と竹は捨身飼虎説話の影響で連想関係をもつようになり、次第に一つの取り合わせをなしたと考えられる。こうした事情は、鎌倉期から室町期にかけて作られた絵画・工芸品における虎と竹の組み合わせとは無関係ではないと推測する。

絵巻物にみえる虎と竹の取り合わせ

次に絵画表象における虎と竹について考える。竹虎図は漢画の画題として親しまれているのだが、実際、それと性格を異にする絵巻物にも虎と竹の取り合わせが見える。以下、「玄奘三蔵絵」と「十二類合戦絵巻」に焦点を当てながら検討を進める。

「玄奘三蔵絵」（藤田美術館蔵）は鎌倉後期の宮廷絵師・高階隆兼によって制作されたものであり、詞書の原拠は『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』とされる。絵巻第四卷第二段には、玄奘三蔵が天竺を旅したとき、捨身飼虎の聖跡を訪ねた場面がある。絵の部分では一匹の虎を登場させ、その近くに竹をも描いている。しかし、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』、さらに玄奘が自ら著した『大唐西域記』を確認すると、該当箇所の記述がごく簡潔で、「竹林」に関する措辞すら見えない。

他方、詞書に「彼の湘浦の竹の類なるべし」^{一七}とある。薩埵王子の血で紅に染められた大地や草木について説明するには、湘妃の竹の伝説を援用している。だが、この記述は原拠に見えず、絵巻独自のものとみられる。両話の共通点からみれば、湘妃の竹の伝説をここに例として挙げるのは適切だが、虎からの連想も認められよう。

絵巻のこの場面は捨身飼虎説話そのものを絵画化したものではない。にもかかわらず、捨身飼虎の聖跡を絵画で表現するためには、虎と竹が重要な素材とされたことが窺われる。

「十二類合戦絵巻」も虎と竹の取り合わせの絵画化を知る上で貴重な資料である。絵巻は三巻からなっており、伝本が多く、現存最古のものは堂本家本である。^{一八}内容は十二支の歌会から始まり、狸の軍勢との合戦へと展開していく。擬人化された十二支のうち、竹との取り合わせが強調されるかのように、虎は竹柄の服を着用し、また竹の文様を入れた扇を手を持つ。また、合戦の場面では、虎の兜も竹の葉の形に造形されている。先学によれば、当該絵巻の動物表現は和歌・連歌における付合と密接な関係にある。^{一九}虎の造型の源泉について

も、連歌寄合書に示された竹との付合に求めるべきと考えて誤りないであろう。言い換えれば、和歌・連歌の世界で成り立った竹との取り合わせを素材として虎の特徴を表したと解されよう。

おわりに

本発表を通じて、虎と竹は捨身飼虎説話を詠みこむ和歌での受容を経て、のちに連歌において連想関係をもつ付合語となったことを確認する。こうした仏教説話や和歌・連歌に根ざした発想は、中世以降に絵画化、意匠化された虎と竹の取り合わせに大きな影響を与えた可能性が十分に考えられる。

注

一 宮崎圓通監修『照顧寺蔵（重要文化財）本願寺親鸞聖人傳繪』本願寺親鸞聖人傳繪刊行会、一九八九年、六二頁。この作例の存在は松本直子「消された豹をめぐって：二条城二の丸御殿遠侍障壁画《竹林群虎図》の図像学的考察」（『文化学年報』六九、二〇二〇年）より知り得た。

二 例えば、日本人画家は虎図を製作するさい、牧谿筆《龍虎図》（大徳寺蔵）を規範としたと指摘されている。松本氏前掲論文参照。

三 東京大学史料編纂所編『民経記 六』（岩波書店、一九九二年）による。

四 賀茂祭における下部らの装束の過差は少なくとも十一世紀初期に問題となっていた。丹生谷哲一「賀茂祭と検非違使の位置」（同『増補 検非違使』平凡社、二〇〇八年、三九〇頁）。

五 『新編日本古典文学全集 44 方丈記 徒然草 正法眼藏随聞記 歎異抄』（小学館、一九九五年）による。

六 こうした装束が歌の意を示すことは、早くも『今鏡』巻二の「白河の花の宴」の段に例証が見いだせる。安良岡康作『徒然草全注釈 下巻（十三版）』（角川書店、一九八六年、四二〇～四二六頁）を参照。

七 成瀬一三『能楽の研究』成瀬よつ、一九三八年、二三頁。

八 藤原定家『明月記』建仁二年（1202）四月二十三日条では、賀茂祭における近衛使車の風流についても「今様心」と評する。

九 金井紫雲編『東洋画題綜覧 第六冊』「竹に虎」項（芸艸堂、一九四二年、五六一頁）ほか。

一〇 『新編日本古典文学全集 42 神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（小学館、二〇〇〇年）による。

一一 田中宗博「捨身飼虎説話と和歌」（藤岡忠美先生喜寿記念論文集刊行会編『古代中世和歌文学の研究』和泉書院、二〇〇三年）。

一二 宮内庁書陵部編『看聞日記紙背文書 別記』（養徳社、一九六五年）による。濁点は私に補う場合がある。

一三 大阪俳文学研究会編『兼載独吟「聖廟千句」一第一百韻をよむ一』（和泉書店、二〇〇七年）による。

一四 例えば、『連歌新式追加並新式今案等』に「一本歌事 三句にわたるべからず〔本説物語同之〕但逃歌あらば不可嫌之」とある。山田孝雄、星加宗一（編）『連歌法式綱要』（岩波書店、一九三六年）による。

一五 北海道大学附属図書館蔵本による。

一六 『室町前期和漢聯句作品集成』（臨川書店、二〇〇八年）による。

一七 小松茂美編『続日本の絵巻 4 玄奘三蔵絵 上』（中央公論社、一九九〇年）による。

一八 本発表では特に断らない限り、堂本家本「十二類合戦絵巻」を中心に取り上げる。『新修日本絵巻物全集 18』（角川書店、一九七九年）所収の絵と詞書を参照。

一九 「十二類・異類のイメージ」（網野善彦ほか編『鳥獣戯語』福音館書店、一九九三年）、中野真麻理『十二類歌合』覚書（『奈良絵本・絵巻研究』一、二〇〇三年）ほか。齋藤真麻理『異類の歌合 室町の機知と学芸』（吉川弘文館、二〇一四年、七二頁）では虎の造型に言及した。